

## 「東海道線旅行図会」(明治40年)

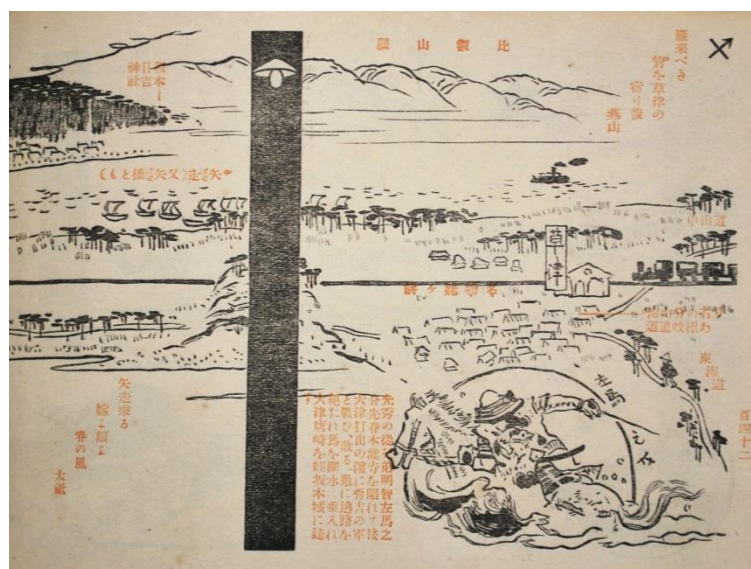
明治22年(1889)に東海道線の新橋－神戸間が全通し、草津にも鉄道が通ることとなりました。やがて国内の鉄道網が整備されていくと、人々の旅行手段は徒歩から鉄道へと変化します。

本書はそのはしがきに「鉄道による旅は早くて便利ではあるが、歩き旅の風情には劣るため、鉄道沿いの両側の視界車窓の展望、山水、田圃、市街村落、名所古跡、其他公私の建築物より風俗習慣の異に至るまで、<sup>ことごと</sup>悉く絵画をもって実写したものである。」という趣旨が記されたように、全体で200ページにおよぶ内容は紀行文と沿線風景を連続的に描いた絵で埋め尽くされた一冊です。

草津付近を見てみると、鉄道路線とともに、湖上をゆく帆掛け船と蒸気船、あわせて東海道・中山道の道すじなどが描かれ、湖上を馬で渡ったという明智左馬之介湖水渡りの伝説にかかる挿し絵が加えられています。

なかほどに配された縦長の黒い棒は、本書に共通の描き方で、トンネルに入って景色が真っ暗になることを示しています。草津駅からやや左に描かれた黒い棒は旧草津川のトンネル、さらには写真からは外れますが、瀬田川までの位置に狼川トンネルを示す黒い棒が配されています。

著者には小説家の田山花袋ら4名が名を連ね、挿し絵が楽しい資料です。



東海道線旅行図会 草津周辺部分